

# 当院内視鏡センターにおけるブリーフィング導入の試み ～チーム医療の推進を目的として～

日本赤十字社和歌山医療センター 第二外来<sup>1)</sup>，消化器内科部<sup>2)</sup>

川合 万里<sup>1)</sup>，赤松 拓司<sup>2)</sup>，山下 幸孝<sup>2)</sup>，菅原 美紀<sup>1)</sup>，上田久仁子<sup>1)</sup>，  
谷垣内郁余<sup>1)</sup>

索引用語：ブリーフィング，チーム医療，内視鏡治療，ESD

## 要 旨

近年，機器や技術などの発達により内視鏡治療は飛躍的に進歩し，また，治療内容もより複雑化している．一方で，高齢化社会の到来に伴い，合併症が多いハイリスクな患者も増加している．そのため，内視鏡治療を実施するにあたり，事前にチーム内で治療内容と患者情報を十分に共有することがより重要になっている．今回，治療内容や患者情報に関してチーム内で情報共有を行う目的で，内視鏡的粘膜下層剥離術の術前にブリーフィングを導入し，参加した医師・看護師に対してアンケートを施行した．その結果，ブリーフィングは情報共有に有効であり，今後必要であるとの意見が大勢を占めた．また，安全に対する意識の向上についても一定の効果があると考えられた．ブリーフィングは，より安全かつ円滑な治療や個々の状況に応じた看護を行うことに有用であり，さらにチーム医療の推進に役立つと思われた．

## はじめに

近年，機器や技術などの発達により内視鏡治療は飛躍的に進歩し，治療内容もより複雑化している．一方で，高齢化社会の到来に伴い，合併症が多いハイリスクな患者も増加している．ゆえに，内視鏡治療実施にあたっては，事前にチーム内で治療内容と患者情報を共有する重要性が益々高まっている．その解決策としては，チーム内での情報共有の時間を十分に確保することが理想的であるが，一方で日常診療現場は多忙を極めており，そのうえ内視鏡治療の件数も増加の一途をたどっていることもあり，全て

の内視鏡治療症例に対して十分な情報共有の時間を確保するのも容易ではない．したがって，より効率的かつ有効な情報共有の方法を模索していく必要がある．

今回，チーム内での情報共有のために航空業界や医療業界でも導入されているブリーフィングの手法を内視鏡治療時に導入することとし，最初の試みとして内視鏡的粘膜下層剥離術（endoscopic submucosal dissection：ESD）の術前に応用し，さらに経験者にアンケートを実施したのでその結果を報告する．

## ブリーフィング方法

### 参加者：

術者・介助者（医師），担当看護師．外回りの看護師が加わることもある．

（平成26年9月24日受付）（平成27年2月1日受理）  
連絡先：（〒640-8558）

和歌山市小松原通四丁目20番地  
日本赤十字社和歌山医療センター  
第二外来

川合 万里

**タイミング：**

患者入室前，あるいは麻酔開始後の内視鏡挿入前

**時間：**

数分（概ね3分以内）

**内容：**

術者からは，病変や治療手技に関する情報（病名，病変の位置，治療戦略および方法，難易度，予定時間，使用デバイスなど）および患者特有の情報（患者背景や既往歴，術中に予測される偶発症と対応法やその際の各人の役割など）．看護師からは，病棟からの申し送り（バイタルサイン，その他）などの情報．

## アンケート方法

**対象：**

ブリーフィングを経験した医師（18名），  
看護師（16名）

**方法：**

選択法と自由記載法による

**内容：**

（対看護師）

### 1. ブリーフィングはチーム内での情報共有に有効だと思うか

（そう思う，どちらかと言えばそう思う，  
思わない，分からない，から選択）

### 2. ブリーフィングは必要だと思うか

（そう思う，思わない，分からない，から  
選択）

### 3. ブリーフィングによりどのような利点があったか

（複数選択および自由記載）

- 1) リスクが共有できた
- 2) 予測される事態に備えられた
- 3) 治療目的が明確になった
- 4) 患者に応じた看護を行えるようになった
- 5) 術中の観察ポイントが明確になった
- 6) 看護記録の記載内容に変化があった

### 4. ブリーフィング導入前と比較して何か意識の変化はあったか

（複数選択および自由記載）

- 1) 安全に対する意識が向上した
- 2) チームの一体感を感じるようになった
- 3) 治療の流れを意識するようになった
- 4) 病棟からの情報収集に積極的になった
- 5) 医師と親近感を感じ話しやすくなった
- 6) コストの取り忘れに注意深くなった

（対医師）

### 1. ブリーフィングはチーム内での情報共有に有効だと思うか

（そう思う，どちらかと言えばそう思う，  
思わない，分からない，から選択）

### 2. ブリーフィングは必要だと思うか

（そう思う，思わない，分からない，から  
選択）

### 3. ブリーフィングによりどのような利点があったか

（複数選択および自由記載）

- 1) リスクが共有できた
- 2) 安全に対する意識が向上した
- 3) 術中の指示にたいして看護師の対応が円滑になった
- 4) 看護師と親近感をもてるようになった

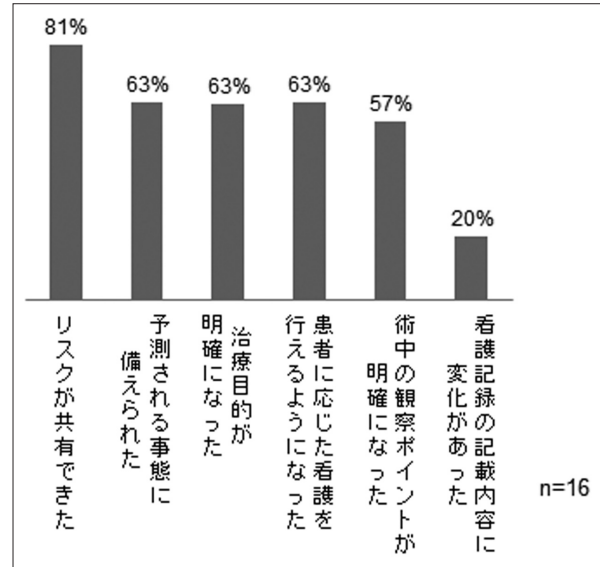
## 結果

ブリーフィングはチーム内での情報共有に有効だと思うか，という問いに対しては，100%の看護師と94%の医師がそう思うまたはどちらかと言えばそう思うと答えた（図1）．また，ブリーフィングは必要だと思うか，という問いに対しては，100%の看護師と84%の医師がそう思うと答えた（図2）．

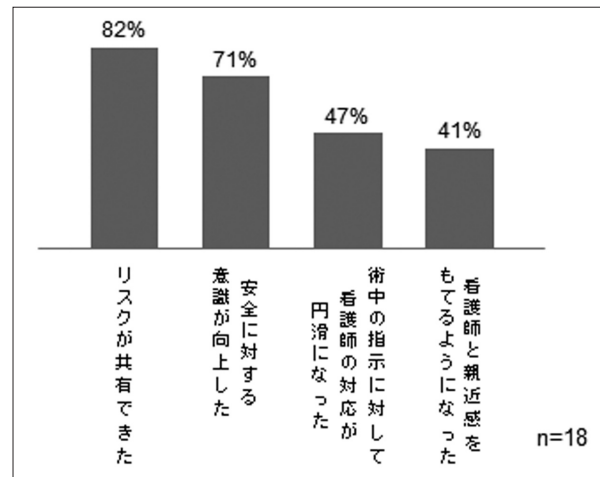
看護師に対する，ブリーフィングによりどのような利点があったか，という問いに対しては，81%がリスクが共有できた，63%が予測される事態に備えられた，63%が治療目的が明確になった，63%が患者に応じた看護を行えるようになった，

た、57%が術中の観察ポイントが明確になった、20%が看護記録の記載内容に変化があった、と答えた(図3)。医師に対する、ブリーフィングによりどのような利点があったか、という問いに対しては、82%がリスクが共有できた、71%が安全に対する意識が向上した、47%が術中の指示に対して看護師の対応が円滑になった、41%が看護師と親近感をもてるようになった、と答えた(図4)。

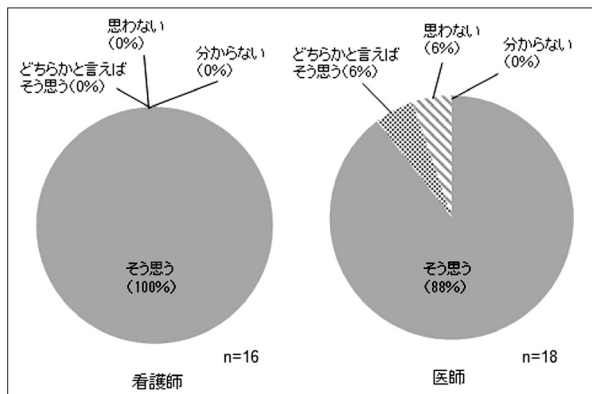
看護師に対する、ブリーフィング導入前と比較して何か意識の変化があったか、という問いに対しては、81%が安全に対する意識が向上した、81%がチームの一体感を感じるようになった、56%が治療の流れを意識するようになった、38%が病棟からの情報収集に積極的になった、33%が医師と親近感を感じ話しやすくなった、7%がコストの取り忘れに注意深くなった、と答えた(図5)。



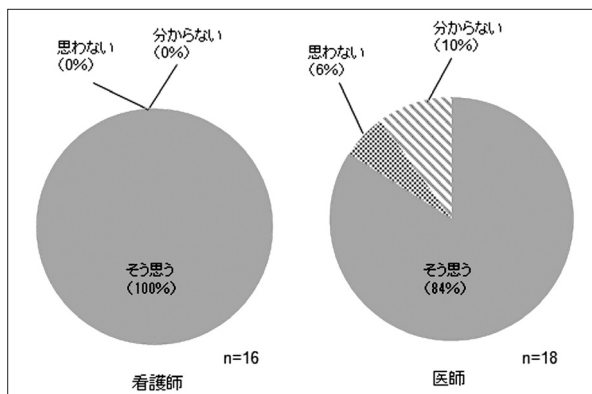
【図3】(看護師)ブリーフィングによりどのような利点があったか？(複数選択可)



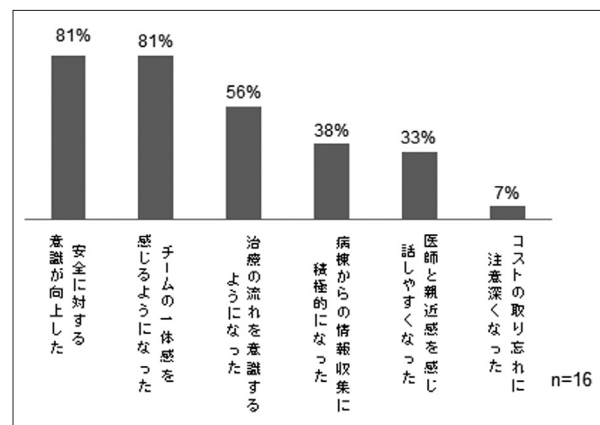
【図4】(医師)ブリーフィングによりどのような利点があったか？(複数選択可)



【図1】ブリーフィングはチーム内での情報共有に有効だと思うか？



【図2】ブリーフィングは必要だと思うか？



【図5】(看護師)ブリーフィング導入前と比較して何か意識の変化があったか？(複数選択可)

## 考 察

ブリーフィングは結成されたばかりの多職種チームが短時間で必要な情報を共有するための手法で、航空業界など他業界でも広く行われている。航空業界では、就航前には必ずブリーフィングを実施し、情報の共有や非常時対応等の確認を行いチーム内で共通の認識を持っている<sup>1)</sup>。また、発生している事故やインシデントのほとんどにコミュニケーションの不具合が関与している<sup>2)</sup>ことから、専門分野でのテクニカルスキルを磨き続けるとともにチームとして安全を確保するという意識をもってノンテクニカルスキルの向上に努め、チーム内でのコミュニケーションの向上を図ることが事故減少のために重要と考えられている<sup>1)</sup>。医療においても、技術的な要因よりもチームメンバーの間のコミュニケーション障害などノンテクニカルな要因が医学的エラーと有害事象の一般的な原因であると言われており<sup>2,3)</sup>、その打開策としてブリーフィングが導入され始めている。医療においては、ブリーフィングは「短い時間での事前の打ち合わせ<sup>4)</sup>」や「看護師・外科医・麻酔科医などが、術前に短時間で、手術を受ける患者と手術手技に関連した重要な問題について情報共有する<sup>5)</sup>」という形で実施されている。実際に導入し、安全確保や安全確認の意識向上に役立っているとの報告<sup>6,7,8)</sup>もあり、手術直前に短時間で情報共有を行うことは、医療事故減少に役立つと評価されている。短時間で行えるという費用対効果の点からも有用であることから、今後も広まっていく可能性が高いと思われる。内容としては、手術の目的や手順や患者背景に加えて緊急事態への対処方法も盛り込むことが大切とされている<sup>4)</sup>。

今回、内視鏡治療前に、病変や治療手技、緊急時の対応を含む患者特有の情報と、病棟からの申し送りなどにつき短時間で情報共有を行うことを内容としたブリーフィングを実施し、スタッフにアンケートを行った。その結果、特に

看護師は全員が情報共有する事は有効との意見であり、これまでは今回共有したような情報が不足していたと思われた。医師も大半が有効かつ必要との感想を持っていたことから、多忙な日常診療の現場においても、情報共有が重要であることを再認識させられる結果であった。また、短時間で言う事により時間のおよび事務的な負担も許容範囲内であったことがうかがわれ、費用対効果の観点からも有益であると思われた。また、ブリーフィングの利点として、看護師からは、「予測される事態にそなえられた」「治療目的が明確になった」「患者に応じた看護を行えるようになった」などの意見が多かった。「ブリーフィングを行うことにより医師からの情報が得やすくなり、看護計画の立案や修正に効果的であった<sup>9)</sup>」との報告があるが、当センターにおいても、ブリーフィングにより患者背景や注意点を把握することができたことにより、個々の患者に応じた観察や看護の実践を推進でき、看護計画の立案や修正につながったと思われた。また医師からは、「術中の指示に対して看護師の対応が円滑になった」などの意見が多かった。医師の立場からみても、事前に手術手順や代替案などを共有しておくことで、術中の指示に対して看護師の対応が円滑になり、術中のストレスの軽減に繋がった可能性があると思われた。ブリーフィングにより事前に患者情報や治療の留意点・偶発症発生時の対応などを共有することで緊急時の適切な対応につながると期待されるが、実際に当センターにおいても、ブリーフィングを施行していたために安全に手術を施行できた症例を経験している。

また、ブリーフィングにより「チームの一体感を感じるようになった」など看護師の意識変化もみられ、ブリーフィングはチーム医療の推進に役立つと考えられた。ブリーフィング導入前は、看護師が事前に得ていた情報は病棟からの申し送りと専門用語が多く理解が難しいこともあるカルテからの情報が主であり、十分ではないこともあった。さらに、実際の内視鏡治療

の現場では慌ただしいことも多く、医師とのコミュニケーションや情報共有が不十分となることもあった。総じて医師看護師共にチーム医療に対する意識が不十分であったと反省される。今回、ブリーフィングに各自が参加しコミュニケーションを密に行い、また役割分担を明確にすることで、チーム医療に対する意識や責任感の向上にも繋がったと思われる。また看護師からは、今まで医師に対し遠慮がちであったが、「積極的に質問することができるようになった」との意見もあった。同様に、医師も看護師と親近感を持てるようになり、「互いにコミュニケーションを積極的に行えるようになった」との意見もあり、看護師のモチベーションの向上にも繋がっているのではないかと思われた。ブリーフィングの活用により「意思疎通をとりやすいことで、何でも話しやすい組織風土ができることにつながり、スムーズな手術の進行にも繋がる」<sup>10)</sup>との報告もある。副次的な効果ではあるが、医師と看護師が互いに何でも言い合える環境になることが期待されることから、医療の現場においてチーム医療の推進が求められているなか、スタッフ間の連携推進を行う上で大切なコミュニケーションツールになると思われた。

今回の調査により、ブリーフィングはESD術前の情報共有の方法として、短時間で施行しているにもかかわらず有効であるとの実感を得た。今後は、より効果的なブリーフィングのあり方を検討していくと同時に、実際の安全性の改善に対する貢献度を評価していきたいと考えている。さらには、ESD以外の処置においても横展開していくことを検討したい。加えて、「ディブリーフィング(振り返り)を行うこともチームパフォーマンスの向上のために重要」<sup>4)</sup>との意見もあり、ディブリーフィングの導入も今後の課題として検討していきたい。

## 結 論

ブリーフィングは、情報共有をすることにより、安全かつ円滑な治療や個別に応じた看護を可能とし、さらにチーム医療の推進に役立つと思われた。今後もさらに進化させ、かつ横展開も図っていきたい。

## 参考文献

- 1) 小林宏之(公益社団法人日本航空機操縦士協会副会長): チーム医療に求められるノンテクニカルスキル. 日本職業・災害医学学会会誌 2013; 61: 314-318.
- 2) WHO 安全な手術のためのガイドライン 2009
- 3) 相場孝博: チーム医療の観点から 手術室の患者安全 — 総論(ノンテクニカルスキルの観点から見て) — 麻酔 2012; 61: S183-188.
- 4) 中島和江: 平成 23 年度文部科学省特別経費 医療安全能力向上のための効果的教育・トレーニングプログラムの開発 — 医療安全学の構築と人材育成 — 「医療従事者の安全を支えるノンテクニカルスキル」
- 5) WHO 患者安全カリキュラムガイド 多職種版 2001
- 6) 舞原美穂, 津之地紀代子, 米澤里恵ほか: 手術安全チェックリストを用いたブリーフィングに対する意識調査. 日本手術医学会誌 2013; 34: 279-281.
- 7) 久保美幸: 【チームコミュニケーション&ノンテクニカルスキル教育】手術室での効果的なコミュニケーションを目指して～ブリーフィング・ハドル・デブリーフィングの導入. 病院安全教育 2014; 1: 3-9.
- 8) 江原一雅: はじめての医療安全管理学入門(第3回)チーム医療とノンテクニカルスキルの向上. 病院安全教育 2013; 1: 106-111.

- 9) 上村明子, 倉藤晶子, 金子栄子: 執刀前の手術チームミーティング「ブリーフィング」の効果(第二報)手術室看護師の評価.  
日本手術看護学会誌 2009; 5: 64-65.
- 10) 倉藤晶子, 上山明子, 金子栄子: 執刀前の手術チームミーティング「ブリーフィング」の効果(第一報)患者・医師の評価.  
日本手術看護学会誌 2009; 5: 59-63.

---

Key words ; briefing, endoscopic submucosal dissection, ESD, endoscopic therapy, team medicine

---

# AN ATTEMPT TO INTRODUCE “BRIEFING” IN ENDOSCOPY CENTER — FOR THE PURPOSE OF PROMOTION OF TEAM MEDICINE

Mari Kawai, R.N.<sup>1)</sup>, Takuji Akamatsu, M.D.<sup>2)</sup>, Yukitaka Yamashita, M.D.<sup>2)</sup>,  
Miki Sugahara, R.N.<sup>1)</sup>, Kuniko Ueda, R.N.<sup>1)</sup>, Ikuyo Tanigaito, R.N.<sup>1)</sup>

1) 2<sup>nd</sup> Department of Outpatient Clinic, Japan Red Cross Wakayama Medical Center

2) Department of Gastroenterology and Hepatology, Japan Red Cross Wakayama Medical Center

## Abstract

In recent years, endoscopic therapy has advanced dramatically with the development of such equipment and therapeutic technique, and treatment maneuvers has been becoming more complex. On the other hand, with the advent of the aging society, high-risk patients with many complications are increasing. Therefore, it is becoming more important to share information of patient and treatment maneuvers sufficiently within the team of doctors and other medical staff in advance of endoscopic therapy. Now, we introduced “briefing” prior to endoscopic submucosal dissection, for the purpose of sharing information within the team, and participators underwent questionnaires. As a result, the opinion that briefing was effective for information sharing and that it was necessary in the future was major, and also, it seemed that briefing had a certain degree of effect for the improvement of safety awareness. As a conclusion, briefing appeared useful for safer and smoother treatment, in making a nursing according to the individual conditions, and promotion of team medicine.